

## 【主題】

# 学校避難所開設への備え

## 【副題】 南海トラフ地震を想定して

## 【学校・団体名】 兵庫県神戸市立井吹西小学校

## 【役職名・氏名】 校長 川原 耕一

### 1. はじめに

南海トラフ地震への備えは、待ったなしの課題である。およそ100年周期で起こっているが、今年で早77年経っており、可能性の問題ではなく、時間の問題となっている。

その揺れ方にも大きな危惧がある。東日本大震災の震源は沖合130km離れており、かつ深さ24kmもあったので、地震の揺れでの死者はほとんどなかった。阪神淡路大震災の震源は直下で、かつ深さ16kmと浅かったため、死者の9割は揺れによる建物倒壊による圧死であった。南海トラフ地震では、震源の距離は東日本大震災より近く、しかもすべり量は東日本大震災の10万平方キロメートルより多い11万平方キロメートルと予測されている。

死因にも特徴がある。101年前の関東大震災・阪神淡路大震災・東日本大震災でそれぞれ焼死・圧死・溺死であったのに対して南海トラフ地震ではその3つが合わさると予測され、合計死者は32万人とも言われている。また、被害地域も非常に広く、中部地方から九州地方まで太平洋側の地域が広域に被災すると考えられている。

その状態に対応するため、自分自身が阪神淡路大震災で行った避難所運営経験とともに、避難所運営について兵庫県立大学減災復興政策研究科で研究を進めながら、それらの内容を生かして本校で実践的な行動を3年計画で準備し実践し、より現実的な現場対応力の底上げをしようと考えた。

### 2. 【1年目】 令和4年度本校6年生による、校舎への避難者の割り当て

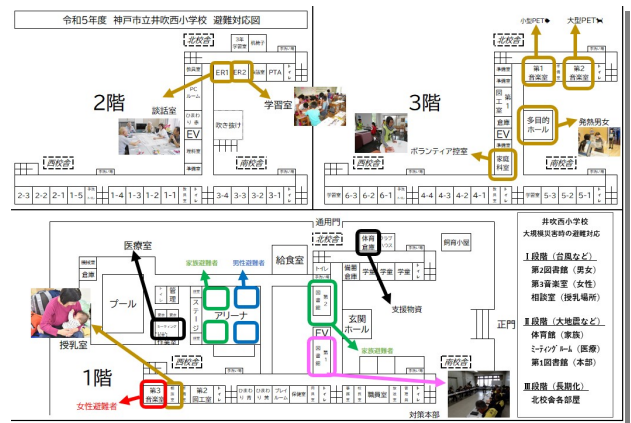
着任して1年目、令和4年度の6年生の学年教員に相談し、1月17日に合わせて6年生約100名にスペシャル授業を行うことにした。それまで設定されていなかった本校校舎への避難者割り当てを、児童が考えるというものである。急に話をして驚かせないよう、事前に学校だより(7月号)で、「本校の避難計画は6年

生が作ります」と周知しておき、基本となる体育館の配置・支援物資置き場・医療スタッフの活動場所は指定しておいた。その後半年間、通常の防災学習を行った上で、本番を迎えた。

想定する来校者は、ペット(大型・小型・ケージ有り・ケージなし)・発熱男女である。更に必要な部屋として、防災コミュニティの方々の会議室・ボランティアの待機場所・避難者の談話室・学校再開までの学習室も必要と考えた。これらの場所をチームで考えるよう、学年教員が事前指導としてあらかじめ数の分だけ班づくりを行って、2023年1月11日当日を迎えた。

体育館に集まり、各班が検討したい部屋を自分たちで選び、それぞれが理由とともに校舎の部屋を割り当てていった。児童の発想は柔軟で、かつ秀逸であった。例えばケージありのペットは、音楽室に設定したのだが、その班に理由を聞いてみると「避難者が居る体育館から対角に位置していて一番遠く、かつ防音が効いているので鳴き声やペットアレルギーの影響を最小限に抑えることができる」というものであった。

次にその割り当て案を授業後半で全体でシェアしたが、当然ぶつかる部屋も出た。女性と発熱男性をどの部屋にするかで再度各班で議論がさせた。白熱し、深めることができた。その結果が次の図である。



今回は特にペットの扱いについて児童の間で議論がなされていたため、環境省自然環境局総務課動物愛護管理室の担当者の方に今回考えた案を検討・評価して

いただき、すばらしいということと同時に、ペットボランティアの受付を作ることで避難所運営者の負担を減らすことができるというご助言をいただいた。

一方、神戸市の調査によると、井吹西小学校区で登録のあるペットは、犬・猫ともに500匹となっており、未登録の想定を合わせると、各800匹ほどがいますと考えられ、在宅避難が原則になるとはいえ、キャパシテ的に全てのペットが井吹西小学校に避難できないことが分かった。そこで飼い主に対して、もし大地震が起こった時でも対応できるよう、ケージの準備や多くの人に慣らす練習などを今からしておくことを資料も付けて学校正門横の掲示板に掲示して、散歩で通る飼い主への発信も行っている。

### 3. 【2年目】令和5年度本校6年生による、地域避難住民の受け入れ訓練

2年目は、実際に地域の方に避難者役をしていただいて、1年目で児童が考えた避難場所の割り当てに児童が誘導する訓練を行った。防災コミュニティの方々に計画への協力を依頼したところ、快く引き受けてくださり、普段なかなか参加できない多くの自治会も巻き込むことができた。防災コミュニティ委員長がおっしゃっていた「子供が絡むと、大人が動ける」という言葉が印象的であった。



避難者役の地域の方々には「発熱した男性」「不安で話を聞いてほしい女性」「三日前に作ったおにぎりを持参した女性」「ペットをつれた男性」など、様々なケースを想定した役をお願いした。その対応を児童たちが行った。児童には事前にどんな人が来るかは伝えていなかったのだからかなり困惑していたものの、後半には立派に聞き取り、適切な部屋に案内したり、担当チームに振って処置をしたりできるようになった。ゲスト参

加していただいた神戸市西区役所の職員の方々からは「わたしたちはこのあと、能登半島へ現地の応援に向かいます。その前に皆さんの訓練を見ることができ、実際のイメージを持つことができました。」という感想もいただくことができた。

また、この年には神戸市の小中学校に外部給電による照明設備がついた。停電しても、外部出力できる自家用車から電源コードをつなぐことで、接続工事が終わった部屋に明かりを付けることができるのである。エアコンなどの大型家電は動かすほどの電力容量ではないものの、夜間には明かりがあるだけで心理的な安全性と防犯性は格段に上がる。そこで、所管の神戸市危機管理室の担当者にも来てもらい、自家発電設備の実演とともに、外部給電による点灯実験もしてもらうことにした。これには、参加した地域の方々・保護者の方が強い興味を示しておられた。



更に自助スキルのアップのために、大阪にある川上産業さまにご協力いただき、荷物の梱包などに使ういわゆるプチプチをつかったポンチョづくりを指導していただいた。児童たちは軽くてことのほか暖かいことを知り、冬場の発災時にはこういったものを使って対策することができることを学んだ。

### 4. 【3年目】令和6年度本校6年生による、大学生との防災学習および本校教職員による避難所開設訓練

本校の避難所運営スキルアップの最終年としての3年目は、児童と職員それぞれのまとめを行った。

教職員については、教職員による受け入れ訓練を職員研修として行った。昨年是不審者対応で兵庫県警の警部に実際に不審者役になっていただき校舎に侵入することでいかに対応が難しいかを、本校教職員は知っている。今回も実践型の訓練を通して、対応力をあげることができた。今回は地域ではなくあえて避難役と



受け入れ役を教職員相互で行うことで意見を出し合い、いざというときに少しでも安心して対応するスキルと心構えができたと思われる。

6年生児童については、大阪公立大学の防災研究チームとコラボして、「普段から持ち歩ける防災ポーチ」づくりを行った。小学校の防災カリキュラムにも防災リュック作りがすでにあり、また児童への事前アンケートで「必要ないと思われる防災学習項目」の中にも高い数値がでていた。そこで、本校教員と大学生が何度もミーティングを行い、単なる防災リュックではなく、普段から持ち歩き、中身を使い、足りないものを補充する使い方をすることで、いざ災害に直面したときに使えるポーチづくりを目指すことになった。

各家庭の協力を得て、児童らは様々な工夫を凝らしたポーチを作ってきた。特に「家族の写真を入れておく。災害時に癒やされるから」といった、既成のマニュアルにはない児童ならではの秀逸な発想が光った。

それらを各クラス・各班でシェアし、かつ手早くteams上のパワーポイントを共同編集することで、シェア→パワーポイント作成→各班ごとの発表までを約1時間でやりきることができた。平常の授業でのGIGA端末の取り組みだけではなく、普段から児童たちが自分たちでteamsにformsでアンケートを取り、パワーポイントでプレゼンをする場面を作るなど、学年の積み重ねが大きくモノをいう場面でもあった。



今回の授業で、作って終わりではなく、普段から持ち運べていざというときに役立つポーチとして、児童からは

- ・長いストラップつきのこぶりなポーチ
- ・ホイッスルなどをポーチに付ける
- ・朝の登校時に使えるような中身にする
- ・家庭内でいつも座る椅子など、1日のなかで絶対

通るルート上に置く  
といった提案がなされた



一方、児童とともに授業を作った大学生たちからは

- ・パワポを楽しく作ってくれてよかった。防災意識をあげるきっかけになればうれしいです。
- ・話し合ってたんだんプレゼンをつくっていたのに驚いた。聞いていて楽しかった。
- ・いろんな意見が聞けて嬉しかった。「こんなグッズがあるんや」「私もこれを入れたい」という学びモードに入れました。家族の写真を入れるアイデアが特によかったです。今後もアップデートしてってください。

といった講評を児童に返した。児童たちも非常に満足そうであった。また、今年の3月に能登半島へボランティアとして参加した大学生が、実際の能登半島の状況を写真を交えて発表し、発災当初だけではなく、まだまだ仮設暮らしや電気ガスといったインフラが復旧し切れていない現状も児童に伝えた。そして粘り強い支援と寄り添いが必要である、この夏もう一度能登に行く、という決意を聞いて、児童たちは報道だけでは聞けなかった現実には、はっと胸を突かれたようであった。

参観に来た神戸市教育委員会の指導主事からは

- ・自分事に落とし込むのが大切である。
  - ・インプットしたものをアウトプットすることが大事である。今回の学びは、学年の積み重ねの成果とともに、その2点をしっかり達成できていた。
- という感想が述べられた。

来年の1月には、福島県の被災した大学生を呼び、セッションを行う予定で有り、6年生の成長が楽しみである。

一方、同じ7月には、本校職員による避難者受け入れの相互訓練を行った。これは、阪神淡路大震災の経験を持つ教員がどんどん減る中で、若手教員でも自信をもって防災学習の指導ができるようになることと共に、実際に発災したときの実践力向上の2つを狙って行ったものである。

設定は、発災が午後4時、児童はおらず全職員が勤務していて、初動として避難所対応に専念できる状況とした。



実施した結果として、具体的な事前想定ができた、即応力が確認できた、想像力を働かせて想定できたという点が挙げられる。また、「自分事」として取り組めた姿勢も評価できると思う。

これらの成果は、今年が阪神淡路大震災30年であるということもあり、神戸市で「神戸ともしびプロジェクト」という取り組みを全市をあげて行っていることもあるが、やはり地域性が出たのではないかと考えられる。つまり、津波で多くの被害を出した東北の方が「津波でんでんこ」を徹底しているのと同じように、やはり唯一の都市直下型地震の被災県である兵庫県・神戸市の職員は地震による被害対応への意識が相当高く、普段から考えているという側面が出ているということである。



校内の振り返りでは

- ・東日本大震災のとき、鶴住居小学校では管理職が不在の中、職員で釜石東中学校との連携で無事避難させたこと
- ・従って、職員一人一人が危機管理能力を高める必要があること
- ・おそらく停電になると思われるため、情報収集はきわめて困難になる。ラジオ、防災無線など、普段使わないものが生きてくるという観点を持つこと
- ・今回たくさんの見直すべき点が出てきたが、防災は加点方式でよい。今回の成果に上積みしていけばよいこと

といった点を話した。今年度中に防災部会で振り返りを行い、部屋割などを改善していく予定である。

## 5. まとめ

本校でのこの3年間の取り組みは、どの学校でもできることだと思う。特に、学校で被災者対応から救援物資受け入れ、学校再開の動きまでを考えたとき、何でも学校単体で行おうとするワンオペ体制は、すでに限界に来ている。お金を使わずとも、その学校の特性に応じた対応を、地域の方やステークホルダーのメンバーと語り、工夫することで、自ずとその学校スペシャルが生まれるはずである。その努力が想定外を想定外でなくし、更に言えば「社会に開かれた学校作り」につながっていくのではないだろうか。

今後は今回の訓練を踏まえた教職員による地域住民の受け入れ訓練、職員と保護者による安否確認訓練、地域の方による避難所開設訓練および自治運営訓練といった多面的な訓練を行うことで、公助が始まるまで持ちこたえるための自助・共助のスキルをさらに高め深めるスキームを構築していきたいと考えている。